

「ありがとうございます。横浜銀行元町支店でございます」

「あの、振込があったかどうか確認をしたいのですが・・・」

「ではお名前と口座番号をお願いいたします」

「望月設計事務所です。口座番号は普通口座で七七一二四三七です」

「はい、少々お待ち下さい」

「お待たせいたしました。お振込は、いつからの分を申し上げればよろしいでしょうか？」

「はい、二月二十一日から、昨日二月二十八日までの間に振り込まれている分があれば教えてくださいいただきたいのですが」

「はい、それでしたら、一件ございます。二月二十七日に米倉信夫様から二十四万七千円振り込まれています」

「二月二十七日ですね。お忙しいところありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

電話を切って安田は経理主任の村尾に内線電話でこの件を伝えた。

「はい、村尾です」

「おはようございます。安田です」

「ああ、おはよう」

「振込の件ですが、横浜銀行に確認したところ、米倉信夫様から、おとこの二月二十七日に振込があったことがわかりました」

「振り込まれた金額は？」

「はい、二十四万七千円です」

「それなら米倉様はOKだな。でも他に中里様や牧野様の分がまだ振り込まれていないということだな。急いで、中里様と牧野様に再度支払いのお願いをしてくれ」

「はい、わかりました。早速、電話を入れてみます」

安田は顧客管理のファイルを開くと、中里祐介と牧野光雄という顧客の連絡先の番号を控え、受話器を持った。

「もしもし、中里でございます」電話に出たのは、中里の妻、みさ子夫人である。

「私、望月設計事務所の安田と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、祐介様はいらっしゃいますか？」

「申し訳ありません。中里は外出しておりまして夕方まで戻りませんが・・・もしよろしければ、私が代わりにご用件を承りましょうか？」

「では、お願いいたします。実は、先月にご請求させていただきました分のお支払が、まだ確認できませんので、そちらの振込予定日を教えていただけませんでしょうか？」

「大変申し訳ございません！すぐに確認して折り返しご連絡いたします。あの、失礼ですが、お名前をもう一度お願いいたします」

「はい、望月設計事務所 経理課の安田です。電話番号は四七五―二二二七です。よろしくお願いたします」

そう言って安田は電話を切り、「次は牧野様か・・・」と呟いた。